

# イーヴリン・ウォーのユーゴスラビア駐留

## *Unconditional Surrender* における戦争の現実

有為楠 香

### 1. Waugh の第二次世界大戦参加とユーゴ情勢

Evelyn Waugh(1903-66)は第二次世界大戦時、1944年から45年のあいだに軍人としてユーゴスラビアに赴いた。現地での彼の経験及び共産主義への反応と後の文学との関わりを、彼の戦時三部作 *Sword of Honour* のうちの第三部 *Unconditional Surrender*(1961)および、彼の政治的発言やエッセイも加味しながら考察する。

1939年9月、大戦勃発時から積極的に戦争に参加する心づもりだったウォーは、訓練を受けてイギリス軍の士官となる。実際にギリシアの戦場に派遣されるという体験をした後に、1944年、ユーゴスラビアで現地の軍隊と折衝を行うという任務を引き受ける。ユーゴスラビアは大戦当初からナチスドイツの侵攻を受けていたため、現地のユーゴ共産党がブロズ・チトーを指導者に立てて抵抗活動を行っていた。この状況を見たイギリスのチャーチル首相は1944年にチトーと協定を結び、彼の率いるパルチザン軍を援助するだけでなく、イギリス軍がユーゴ国内の戦闘に介入する権利を得た。翌月7月、陸軍の情報将校に任官されたウォーは、首相の長男であるランドルフと共にユーゴへ出発する。つまりウォーは、チャーチルの意図したイギリスによるユーゴ支配の足がかりをつくる、組織の一員として現地入りをしていたと言える。

### 2. 軍事レポートとチトー訪英

ウォーは1945年3月にユーゴを出国後、現地での体験を軍上層部に報告するレポートの作成に取り掛かった。彼が全編にわたってレポート内で強調しているのは、共産主義とキリスト教思想の間には根本的かつ妥協が不可能な差異があること、およびチトーが広範囲にカトリックを弾圧していたことである。さらに現地のカトリック聖職者たちからパルチザンによる暴行について聞き取りを行ったことを論拠に、ウォーの批判対象はチトーを超え、チトーに援助を差し伸べた、祖国イギリスの国家政策へと及ぶ。

このレポートは軍によって公表を差し止められたため、失望したウォーは2ヶ月後、『タイムズ』に匿名で2回投稿し、再度パルチザン軍の虐殺行為を批判する。そこではナチズムとチトー支配との共通の特徴（秘密警察・プロパガンダ官僚組織・市民の理由なき逮捕）や、クロアチア地方諸都市でのキリスト教聖職者の殺害記録を挙げたが、反響を呼ぶことはなかった。

しかし1952年末、当時のイギリス政府がチトーを国賓として招待するというニュースを知ったウォーは、すぐさま『サンデー・エクスプレス』に、署名入りのエッセイ“*Our Guest of Dishonour*”を発表した。このたびも彼が挙げたのは、パルチザンとナチズムとの類似と彼らの虐殺行為であったが、加えてエッセイの肝心だったのは、なぜキリスト教国家たるイギリスがキリスト教徒の迫害者を歓迎できるのかという訴えであった。以前と違って今回の投稿は世論に大きな波紋を生み、翌年にチトーの訪英は実行されたものの、ウォーの元には新聞読者からの賛同が舞い込んだ。

### 3. *Unconditional Surrender*—虚構のユーゴとユダヤ人難民

1961年にウォーは小説 *Unconditional Surrender* を著した。これはイギリス陸軍兵士 Guy Crouchback が国外の戦場を転々としながら、英雄としての名誉と現実の戦争との落差を噛みしめるうちに、カトリックの信仰を見つめるようになる *Sword of Honour* シリーズの最終作、第三部である。

*Unconditional Surrender* でウォーは、40才の将校となったガイに、自分と同じくユーゴスラビア駐留の任務を与える。彼の本来の任務は現地のパルチザンとイギリス軍を協力させるために調停を行うことであるが、軍の任務と離れたところで、ナチスドイツの支配から逃げてきた現地のユダヤ人たちが国外に脱出するのを手伝うことになる。ガイはこの国外脱出を手伝うことこそが自分のキリスト教徒としての使命だと感じ、ユーゴを離脱する寸前まで一人でも多くの難民を送り出すために奔走する。

しかし彼の善意と熱意に反し、彼の行動は必ずしも現地民の助けにはならないことが提示される。ひとつ目の例は彼が現地のカトリック神父に、死んだ妻のためにミサを挙げてもらうようラテン語で会話したことで、パルチザンに疑いを受けた教会が襲撃を受けてしまうことである。この挿話は戦場という各国の利害が絡む場所で、ガイのナイーブな振舞いが災いを呼ぶ前触れである。

さらにふたつ目の例として、彼の浅慮は、より大きな問題であるユダヤ人難民の脱出に際して露呈され

る。ユダヤ人難民のグループを率いているのは、英語が話せる Mme. Kanii という女性であり、彼女はこの戦争の成り立ちについて以下のように言う。

‘...It seems to me there was a will to war, a death wish, everywhere. Even good men thought their private honour would be satisfied by war. They could assert their manhood by killing and being killed. They would accept hardships in recompense for having been selfish and lazy. Danger justified privilege. I knew Italians – not very many perhaps – who felt this. Were there none in England?’

‘God forgive me,’ said Guy. ‘I was one of them.’ (*The Sword of Honour Trilogy*, 702)

「良い人々でさえ個人的な名誉が戦争で満たされると考えました。彼らは自分たちの男らしさを、殺し殺されることで主張できたのです」と言うマダム・カニイに、ガイは「私もその一人だった」と答える。その後ユーゴを出国したガイは、彼が去ってすぐにマダム・カニイは夫と一緒にスパイとしてパルチザンに処刑された、なぜならイギリス人のガイとあまりに頻繁に英語で話していることが、パルチザンの猜疑心に触れたからだったというニュースを知る。

#### 4. まとめ

己の戦争体験を忠実に文章化していた軍事レポートやエッセイと違い、ウォーは *Unconditional Surrender* において、弱者へのパルチザンの暴行が、いつもキリスト教徒である主人公の善意により導かれる例を書いている。このことは、人間社会の思いがけない皮肉な事態の展開が、戦争においてはさらにシビアな、取り返しのつかない結果を生み出すことを強調している。さらに軍人であるガイは無傷でユーゴから生還し、彼の代わりに命を落とすのがユダヤ人夫婦であったことは、常に最も政治的に弱く武器を持たない者に暴力が降りかかることを表している。このことは、民主主義者・共産主義者・ローマンカトリック・ユダヤ教徒・軍人・民間人など、さまざまな属性を抱えた人々が複雑に混じり合うのが戦争であり、しかも彼らが決して安易な結末には至れない現実を表現している。

しかし *Unconditional Surrender* では、最も弱い者をたった一人救うことに価値がある、というキリスト教の原則が強調される。同じくカトリックであるガイの父親がガイに送った手紙の中で言う、‘Quantitative judgements don’t apply. If only one soul was saved that is full compensation for any amount of loss of ‘face’.’ (*The Sword of Honour Trilogy*, 490-91) という文章は、ガイの行動を何度も左右する。

ユーゴに赴く前にガイは「たとえ全世界の孤児を救うことはできなくても、少なくとも自分の知っているたった一人の子供を助きたい」という気持ちで、戦争孤児の子供を引き取り養子にしている。最終的には戦争難民を助けるという英雄的行動でなく、小さな子供を一人、死から救うことこそ、主人公の生まれてきた意義であり、戦争の中で唯一意義のある行動であったというウォーの考えが書かれる。

ウォーの軍事レポートやエッセイは、まずは彼個人の体験記録であり、戦場の現実を切り取ったものとして、取りあげる意義があると考えられる。しかし彼の最終的な立場はあくまで小説家であり、戦時暴力が常に弱者に向けられることを強調し、さらに己の戦争体験をカトリックの立場から文学的に結晶させることに、彼の戦後文学の重点があると言える。*Unconditional Surrender* で終結する *Sword of Honour* はその集大成として数えられるべきものと考察する。

#### 参考文献

Gallagher, Donat, and Carlos Villar Flor. *In the Picture: The Facts behind the Fiction in Evelyn Waugh’s Sword of Honour*. Amsterdam: Rodopi, 2014.

Hastings, Selina. *Evelyn Waugh: A Biography*. 1994. London: Vintage, 2002.

Mojzes, Paul. “Religious Liberty in Yugoslavia: A Study in Ambiguity.” *Occasional Papers on Religion in Eastern Europe*: Vol.6: Iss.2, Article 2. (1986): 23-41.

Sykes, Christopher. *Evelyn Waugh: A Biography*. 1975. Harmondsworth: Penguin, 1978.

Waugh, Evelyn. *The Diaries of Evelyn Waugh*. Ed. Michael Davie. 1976. London: Phoenix, 2009.

---. *The Essays, Articles, and Reviews of Evelyn Waugh*. Ed. Donat Gallagher. London: Little, 1984.

---. *The Sword of Honour Trilogy*. New York: Knopf, 1994.

河合秀和『チャーチル イギリス現代史を転換させた一人の政治家 増補版』東京：中央公論新社, 2018.

柴宜弘『ユーゴスラヴィア現代史 新版』東京：岩波書店, 2021.